

魔法の宿題 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 藤田武士 所属: 茨城県立勝田特別支援学校 記録日: 平成28年2月26日
キーワード: 知的障がい, 読み・書き, 日記, コミュニケーション, できる環境, 自己肯定感

【対象児の情報】

・学年 小学部6年 男児

・障害名 知的障がい

・障害と困難の内容

＜コミュニケーション・話すこと＞

- 自己肯定感が低く、ちょっと注意されただけでもすねてしまうこともある。
- 発表をする場面などでは、発音が不明瞭な部分もあり、うまく伝わらないという苦手意識がある。そのため、ふざけてしまったり、教師に頼ったりすることが多い。
- 話すことに関しては、2語文から3語文で話す能力がある。
- 家では学校のことを自分から話すことはなく、家族に聞かれても答えることはほとんどない。

＜書くこと＞

- 書きたい気持ちはあるが、手指の巧緻性が低く、苦手意識が強い。
- 2cm程度の枠であれば、その枠に合わせて書くことができるが、字形は正確ではない。
- 「よ」「く」などが鏡文字の様になってしまうときがある。

【活動目的】

・当初のねらい

＜コミュニケーション・話すことの目標＞

- 日記を作成することで話の内容を整理し、帰りの会で発表することができる。「かめら絵日記」

＜書くことの目標＞

- 単語練習プリントをテキスト入力で行うことができる。「MetaMoji Note」
- ひらがなの字形に気をつけて書くことができる。「hiragana」

使用アプリの一覧（研究当初）



「かめら絵日記」
無料



「MetaMoji Note」
960円



「hiragana」
無料

・実施期間 平成27年4月～平成28年2月まで

・実施者 藤田武士（研究採択者本人）

・実施者と対象児の関係 クラス担任（学年主任）、国語・算数担当

【活動内容と対象児の変化】

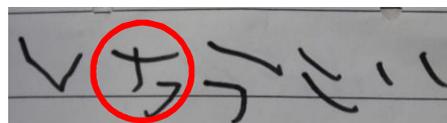
・対象児の事前の状況

＜コミュニケーション・話すことの状況＞

- 帰りの会での「がんばったことの発表」の場面では、何を話していいのかわからないという状況と、うまく伝わらないのではないかと不安と恥ずかしいという気持ちがある。
- ふざけて座り込んだり、物陰に隠れてみたりする姿や、始めから教師に頼ろうとする様子が見られていた。
- 学校での様子は連絡帳を通じてでしか知ることができず、保護者が尋ねても、学校での出来事をあまり話すことはなかった。

＜書くことの状況＞

- ワークシートを使った活動や、国語や算数の授業でのプリント学習は、やりたい、やらなければという気持ちはある。しかし、書くことに対する苦手意識（うまく書けない、書いても伝わらないのではないかと等）が非常に強く、始めからやろうとしなかったり、やり始めても集中が続かなかったりと、学習に対する気持ちの部分と、実際の行動のギャップが大きかった。



【写真①】「よ（2文字目）」の字形があいまい

・活動の具体的内容

上記のような状況から、以下のアプリを活用し、活動を進めていくこととした。

- ★ 日記を作成することで話す内容を整理し、帰りの会で発表する。
- ★ 日記を持ち帰ることで、家庭での保護者と本児の間の会話のツールとする。
→ **自分の考えや思いなどを伝えることができる。**



「カメラ絵日記」

上段には撮影した写真を配置し、下段には日記を入力することができる。入力は、テキスト入力と手書き入力の2種類から選ぶことができるが、テキスト入力で行う。

- ★ プリントやワークシートでの学習において、タブレット上で直接テキスト入力をする。
→ **文字を書くことの負担を軽減させ、学習に集中することができる。**



「MetaMoji Note」

取り込んだデータ上に、直接テキストで入力をする。配付されたプリントをカメラ機能で撮影して取り込んだり、PDFデータを取り込んだりする。

- ★ 失敗してもすぐやり直すことができるタブレット上でひらがなを繰り返し学習する。
→ **本児の「書きたい気持ち」を後押しすることができる。**



「hiragana」

書き方が書き順通りに動画で表示されるので、それを確認してから練習をする。このアプリとプリントや自作教材での学習を並行して行う。

・対象児の事後の変化

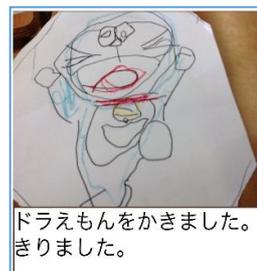
★ 日記を作成することで話す内容を整理し、帰りの会で発表する。

★ 日記を持ち帰ることで、家庭での保護者と本児の間の会話のツールとする。

→ **自分の考えや思いなどを伝えることができる。**

① 活動当初は、毎日作成することはできなかった。初めのうちは、どの授業場面の写真を使うかを本児と相談したり、朝のうちに「今日はどの授業がおもしろそう？」などと聞いて、「今日は絵日記が書こうか。」と約束をしたりした。また、日記に使う写真についても「どの場面の写真を撮って欲しいか、先生に言ってね。」などとあらかじめ伝えておき、写真を撮って欲しいときに自分から申し出るようにした。

② 作成できた日には、アプリで日記を作成する→帰りの会の時に持っていく→作成したものを発表するというサイクルができた。帰りの会での発表も、作成した日記を頼りに、みんなに見せながら発表することができるようになった。みんなの前に出て、自信をもって発表する様子が見られるようになった。周りの友達や、私以外のクラスの担任からも「上手に発表できたね。」や「今日は〇〇がたのしかったんだね。」などと言葉をかけられ、にこにことする場面も見られた。



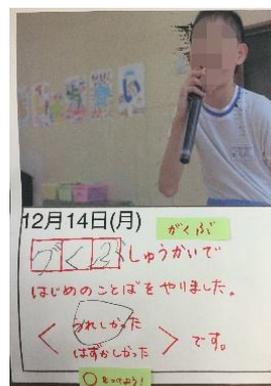
【写真②】学習当初（6月）

③ 一学期のうちは、帰りの会の発表だけの活用であったが、夏休みの家庭訪問時に、「学校の様子は連絡帳でしか分からず、本児がちょっとでも話してくれればいいんですが・・・。」と母親が話していたことから、二学期に入り、作成したものをプリントアウトして自宅に持ち帰るようにした。持ち帰った日記を家族に見せ、家庭での会話の補助資料となればと考えた。そして、9月1日からプリントアウトした日記の持ち帰りはじめ、数日たったある日、変化があった。今までは、私が机を用意して、「〇〇くん、今日も書こうか。」などと言葉かけをしていたのだが、その日は、自分から、iPad を手に「先生、やるよ!」と、はじめて言ってきた。その次の日は、行事があり、作成する時間は5分も無い状況で、今日は無理かなと思ったが、前日と同じようにiPad を自分で用意をし、「先生、やるよ!」と言ってきた。



【写真③】2学期

④ そんな中、文化祭で忙しく、日記に使う写真を撮ただけで、作成まで時間が全くないという日が続いた。そこで、写真の挿入と日付の入力のみアプリ上で行い、残りは自宅での宿題という方法を試してみようと思った。プリントアウトしたものに、私がペンで本児から聞き取った内容を記入し、その一部を空欄とした。文化祭の練習などもあり、何回かそうした時間が無いバージョンのやりとりがあったが、自宅ではやってこず、次の日の朝、学校に来てからやるという日が続いた。そこである日、記入式ではなく、選択式にし、「○」を付けるだけでOK というパターンにしたところ、次の日、私の机の上にドーンと「○」がついた日記が置かれており、本児も「やってきた!」と自信たっぷりに報告してくれた。そして、記述式と選択式を混ぜたバージョンを作成したところ、宿題として自宅でやってくるようになった。その様な本児の変化は、保護者も感じており、連絡帳を通じて「書いたよーと日記を見せてくれました。」と教えてくれることもあった。



【写真④】記入式・選択式

- ⑤ タブレットでのひらがなの練習も比較的順調に進んでいること、本児にも書字に対する意欲や宿題としてのルーチンが確立されつつあることもあり、三学期に入ってから記述式と選択式のパターンでの日記の作成が中心となっている。帰りの会の前などに、その日の学習を一緒に振り返り、本児と話をしながらその日に書く内容を決め、宿題としてほぼ毎日取り組むようになってきている。
- ⑥ さらに2月には、国語の授業で覚えた漢字の読み方を、宿題として日記で復習するという方法を取ってみた。日記としてのその日の記録と学習の定着という両方の面で効果があったのではないかと考えている。

★ **プリントやワークシートでの学習において、タブレット上で直接テキスト入力をする。**

→ **文字を書くことの負担を軽減させ、学習に集中することができる。**

- ① 「MetaMoji Note」アプリを使って、プリントを写真で撮ったり、データを取り込んだりして、そこに直接、テキストで入力することを行った。写真を撮ったり、データを取り込んだりする作業は教師が行っているが、本児は、鉛筆で書く時よりも、早くきれいにプリントを仕上げることができるので、前向きに取り組むことができている。
- ② テキスト入力では、予測変換で単語が出てくるので、書くことはできないが読むことができる漢字については、織り交ぜて単語や文章を作成している。フリック入力での濁音や拗音の入力も同様に行っている。
- ③ 「MetaMoji Note」の活用については、文字を書くことの意欲が高まりや、みんなとおなじにやりたいという気持ちもあり、本児としては、まだあまりメリットを感じていないようである。

★ **失敗してもすぐやり直すことができるタブレット上でひらがなを繰り返し学習する。**

→ **本児の「書きたい気持ち」を後押しすることができる。**

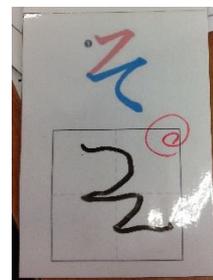
- ① 書く場面では、文字の字形を正しく捉え、自分が書く文字に自信をもつことができればと考え、「hiragana」というアプリを使用した。それと並行して、アプリで練習した成果を、プリントや自作教材(※)を使って練習することとした。

※ 自作教材:ひらがなの書き順を色分けした文字と枠を印刷したものをラミネートし、ホワイトボード用のペンで書けるようにしたもの

- ② アプリでの練習は、本児にとっても楽しいらしく、授業時間だけでなく、休み時間にも取り組む姿も見られた。プリント学習でひらがなを練習することも、今まで以上に意欲的に取り組んでおり、授業自体にも集中して取り組む姿が多く見られるようになった。
- ③ 最近では、プリントとアプリでの学習【写真⑤】よりも、自作教材とアプリを組み合わせでの学習の方を積極的に取り組んでいる【写真⑥】。そして、日によって、書く学習→アプリの順序であったり、アプリ→書く学習の順序であったり、本児なりに、学習の順番を考えて取り組む姿が見られている。
- ④ 書くことへの意欲の高まりにつれて、学習内容もレベルアップしようと、単語の練習も取り入れた。使用したアプリは「ひらがなおけいこ」というアプリである。



【写真⑤】国語の様子



【写真⑥】補助教材



「ひらがな おけいこ」

ひらがな一文字ずつの練習の他、かるたや日常生活で使われる単語の練習もできる。

単語の練習はもちろん、ひらがなの練習も、「hiragana」は、あ行やか行など行ごとの練習であったが、この「ひらがなおけいこ」は、一文字ずつ独立して練習をすることができる。文字の捉えができていない文字とできていない文字がはっきりしているのので、捉えができていない文字を集中的に学習することができた。また、より鉛筆で書く状況に近づける為に、タッチペンも導入し、学習を進めていった。

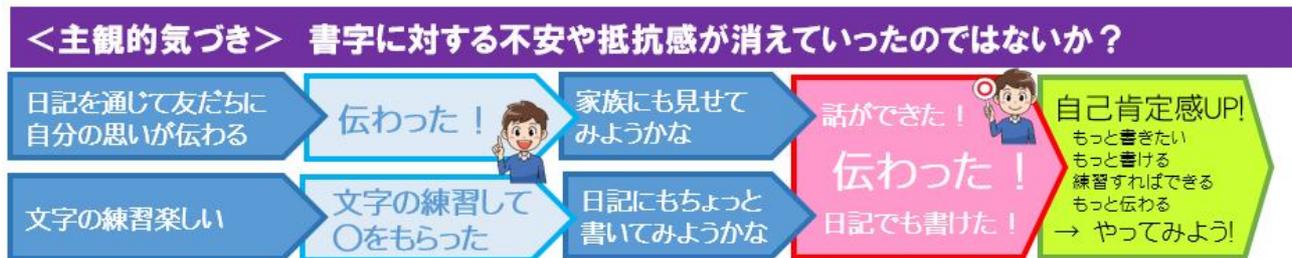


【写真⑦】 国語の様子

- ⑤ こうした学習を進めていったことで、前述の「かめら絵日記」の部分でも触れたが、書くことへの自信がついたようである。絵日記の作成でも、テキスト入力する部分と、鉛筆で書く部分を自分で考えて作成したり、教師に頼んで記入式にしたりし、家庭に持ち帰って宿題で書いてくる様子が見られるようになった。また、生活単元学習などでワークシートを使った学習においても、自分から鉛筆と消しゴムを準備し、ワークシートに文字を書き込む姿が見られるようになってきた。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき



・エビデンス(具体的数値など)

- 二学期から、作成した絵日記を印刷し、自宅に持ち帰るようにしたことで学校の様子を家族と共有できた。連絡帳や個別面談を通じて保護者からも「自分から持ってきて見せてくれた。」「学校の様子がわかり、会話も増えた。」などと、本児にとって伝わる経験が増え、母親にとっても、本児とのコミュニケーションの場面が増えたとのことであった。
- また、日記の作成を毎日の宿題として続ける中で、本児の心の中に変化も現れたようである。12月11日の連絡帳には「昨日は帰ってきてから、絵日記を見せてくれました。「これはマルをつける。男のやくそく。」といいながら丸をつけていました！」と母親からのコメントがあった。本児の「やろう！」という気持ちが見えたエピソードだった。さらに、12月16日の連絡帳には、冬休みの宿題についてのコメントがあり、冬休みの宿題について母親と本児とで前向きなやりとりがあった様子がうかがえた。

書いたよー。と日記を見せてくれました。

【写真⑧】 連絡帳：保護者から 10/9

昨日は帰ってきてから、絵日記を見せてくれました。
「これはマルをつける。男のやくそく。」
といいながら丸をつけていました！

【写真⑨】 連絡帳：保護者から 12/11

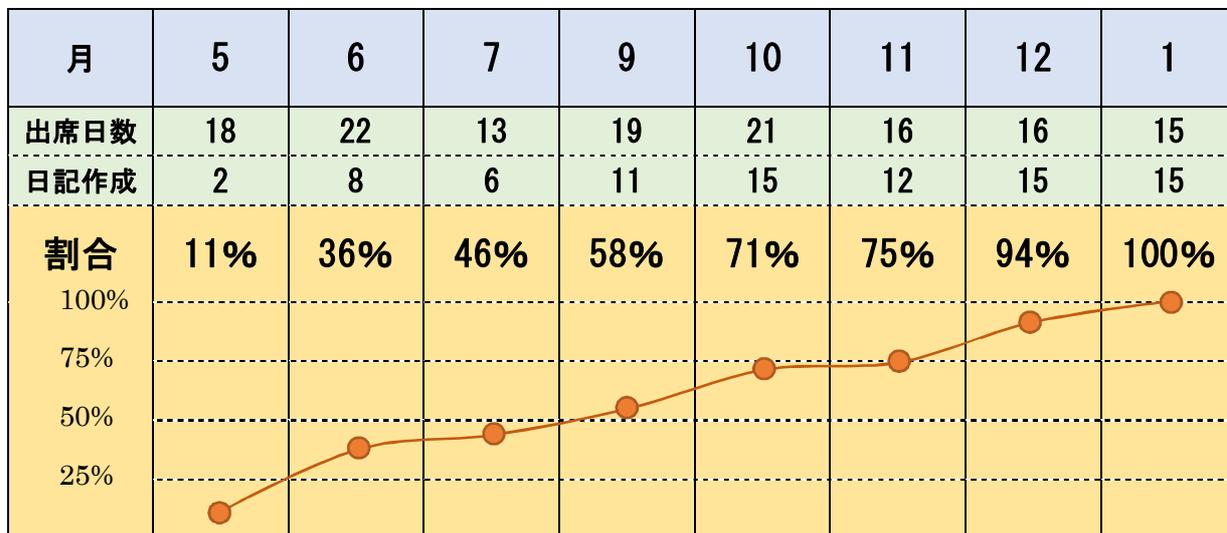
昨日も日記をすまじゅやっています。
字が上手にばつたように感じました！
厚くなってすまじゅの宿題(冬休みの)
1ページだけだげますか？7ページ
枚ぐらいの量だそうです。(本人いわく...)

【写真⑩】 連絡帳：保護者から 12/16

- こうした、日々の様子や母親からの連絡帳を通じたコメントなどにあわせて、宿題としての日記の作成も含め、日々の日記への取り組みの様子は、数値としても表れている。下記の【表①】は、5月から始めた日記の作成日数をまとめた表である。表の2行目は出席日数、3行目は日記を作成した日数となっており、一番下の4行目は、出席日数に対する日記の作成をした日数の割合である。

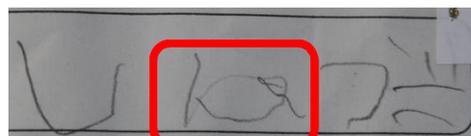
【表①】日記作成の割合の変化

平成28年1月29日（金）現在

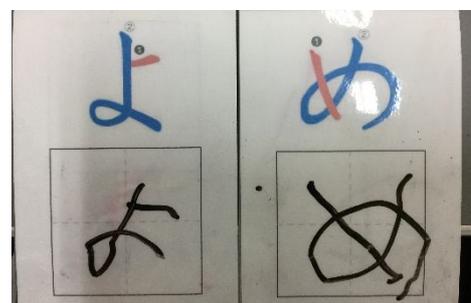


※11月の出席日数は18日であるが、修学旅行があった為、2日分除いている。

- プリントやワークシートの学習に関しては、本児が使用する教材を、「MetaMoji Note」でのテキスト入力用と、鉛筆などでの書字用の両方を用意することで、本児が自分で選択できるようにしたが、割合としては書字用の教材を使用することが多かった。操作自体が、本児にとってやや面倒な印象があったようで、本児の中で有用感を引き出すには至らなかった。また、前述もしたが、書くことに対する自信がついてきたこともあり、プリントやワークシートが配られると、鉛筆と消しゴムをさっと用意して、取りかかる姿が普通となった。
- ひらがなの文字に関しては、4月当初は、「よ」をはじめとした交差したり、曲線があったりする文字の字形の捉えがよくなかった。アプリを活用した繰り返しの練習や、それと連動したプリントや自作の教材を活用し、書くことに対する自信をつけてきたことで大きく改善が見られている。【写真⑪】と【写真⑫】を見比べてみても一目瞭然である。
- こうした国語の授業における学習と日記の作成に、iPad上でのテキスト入力に加え、直接書き込む記述式を導入したことにより、「表現する→伝わる」、「書く→伝わる」というところで自信につながった。また、日記の作成もひらがなの練習も、両方において意欲が高まり、相乗効果をもたらせたのではないかと考える。



【写真⑪】平成27年4月当初の文字「よ」



【写真⑫】平成28年1月現在の文字「よ」

【今後の見通し】

「できた！」
「伝わった！」
の経験が、生活全般での積極的な行動へとつながって
いっている



の作成は継続して取り組む

本人が選択できる環境を整える



タブレット



書く

ゴム印スタンプ
シール ……他

伝わる経験の積み重ねと自分の
思いを表現できる機会の保障

様々な手段で対応できる方法を
準備しておくことで、安心して
学習に取り組む

・その他エピソード(画像などを含めて)

■ 書くという活動は、国語や算数、生活単元学習だけではなく、図画工作においても描くという活動がある。描くことに対して苦手意識が強かった本児に対して、絵を描く活動においてもタブレットを活用してみた。まずは、タブレット上で下絵を描く方法を提案した。失敗してもタップ一つですぐにやり直すことができるからである。そうしたところ、スムーズにタブレットを導入することができ、とりあえず描いてみては消して、描いては消してを繰り返しながら、自分が納得する下絵を描くことができた。【写真A】においては、タブレット上で描いた下絵を見ながら、紙皿に顔を描くことができた。



【写真A】図画工作での様子①

■ また、【写真B】においても、『遠足の思い出を描こう』という単元で写真を見ながら思い出の絵を描いた場面では、まず写真を画面上に表示し、その上からアウトラインを取り、色を付けていくという流れで取り組んだ。教師と相談しながらではあったが、「ここはこうだね。」とか「この色は何色にしようか？」などとコミュニケーションを取りながら、絵を描き進め、作品を仕上げることができた。図画工作においても、本児が安心して取り組むことができる環境を設定できたことで、効果的な学習活動を展開することができたのではないかと考える。



【写真B】図画工作での様子②